

人文社会学部創立 20 周年記念式典

11月7日午前、名古屋市立大学「人文社会学部創立 20 周年記念式典」が行われた。写真上は「人文社会学部成人認定式」の場面だ。城戸毅・初代学部長から伊藤恭彦・現学部長に、認定状なるものが手渡されるところだ。なかなか「味」がある趣向だ。

場所を 201 教室からキャンパス東門近くに移し、記念植樹へと進んだ。次の写真のように「白樺雅楽会」の皆さんによる雅楽の演奏のもとで、桜の植樹が学長や名古屋市来賓らの手により行われた。雅楽の演奏は想定外であり、人文社会学部らしさを感じさせる「にくい演出」だ。記念植樹は初めての経験で、私にとっても「記念」になるものだった。

写真下は当日に配布された「20 周年記念誌」の表紙である。学生編集委員の皆さんの奮闘努力により作成されたもので、ビジュアルでじつに親しみやすい。表紙だけでなく、中身も学生らしいセンスの良さが伝わってくる。卒業生寄稿文「仕事と生活」、女性特集インタビュー「仕事・結婚・育児」、在学生寄稿「名市大生の今」、「今昔学生生活」は参考になることが多かった。

また、「創設期学部長寄稿文」と「人社の歴史」は学部創設からの歩みを振り返り、自分自身の 20 年を回顧する資料でもある。名古屋市立女子短大の時代から「4 大化」の改革に多少とも関わってきた。2 つの短大と名市大教養部の統合により、人文社会学部が誕生した。学部「設立準備委員」なども務め、創設後は現代社会学科主任、大学評議員、学部長・研究科長、そして人間文化研究所長を歴任してきた。

人文社会学部は「はたち」の成人になったが、学部・研究科をとりまく環境はきわめて厳しいものがある。それは学長や学部長の挨拶の端々にもあらわれていた。文科省の人文社会系学部に対する「攻撃」だけでなく、「法人化」10 年や人口減少時代の影響など課題は山積している。わが「心のふるさと」人文社会学部の行方を注視していきたい。

(2015 年 11 月 9 日)

